土屋（野口）実君（2 組）の死を悼む

2 月 27 日、土屋（旧姓野口）実君（2 組、坂城町出身）が亡くなりました。
3 月 2 日、告別式が群馬県嬬恋村にて執り行われ、地元の 2 組同級生 6 名が参列し、土屋君にお別れをしてきました。
土屋君の訃報を聞いて、多くの同期の皆さんから追悼文が寄せられています。
以下、簡単に紹介します。

まずは、告別式に参加した仲間を代表して丸山幸雄君から思い出を。
▲丸山幸雄（2 組）「土屋（野口）君は確か、京都大学工学部に入学したと思います。それがいつのまにか法学部卒になっていたので不思議に思って聞いたところ、“大学（工学部）の数学が難しくて”と言っていたのを覚えています。
「つちや旅館」に入ってからは、嬬恋村から上田駅にお客の送迎バスを、館主みずから運転してきました。その際に、時々ふらっと私の家（上田市原町）に寄って、嬬恋キャベツをたくさん置いていってくれました。美味しいけれど、食べきれなくて近所にお裾分けして、大変喜ばれたことを思い出します」

土屋君と同郷で同級生の小宮山豊君から高校当時の思い出を。
▲小宮山豊（2 組）「彼とは高校時代、電車通学で一緒になることが多く、車中で加山雄三の歌を口ずさみ、そして英単語の勉強をしていたのを思い出します。人の話をよく聞き、人の心を大切にするいい男でした。謹んでお悔やみ申し上げます」

以下の追悼は、私信なのでお名前は伏せて紹介します。
▲Ｋ君「野口君が亡くなられるとは早すぎますね。土屋旅館は私の実家からも近く、鹿沢スキー場の直近の宿として名前が知られていました」

▲Ｔ君「また一人、同期が鬼籍入りとは、少し早い気もします。我々もいつどうなるか分からない年代に入ったということですね」

▲Ｋさん「野口さんは穏やかでジェントルマンでしたね」

▲Ｋ君「彼の旅館でのクラス会に数回参加させてもらって、大変楽しかったです」

▲Ｔ君「友が逝くのは寂しくもあり、辛いものがあります」

▲Ｔ君「この歳になると、友人の死は悲しく寂しいですね」

▲Ｔさん「何があっても、おきても驚かない年齢になりつつも、やはり寂しいものですね」

▲M君「土屋君とは通学時に毎朝顔を合わせていたものです。当時はいがぐり頭で丸くて、人懐っこい表情が記憶に残っています」

合掌

【写真：2 組クラス会（19 年 10 月 9 日）、「つちや旅館」前にて、
前列右端が故土屋実君】

（2021 年 3 月 6 日、上原記）

以上